新刊紹介

房山隋唐石經『妙法蓮華經』（上・下）

福井文雅

北京市近くにある房山雲居寺（ぼうざん・うんごじ）には、澤山の經文が石に刻まれて碑文として殘っている。中國では戰亂がたびたびあったので、經文のような貴重でしかも後世に殘したい文獻は、紙よりも石に刻んで殘す習慣があった。それを「石經」（せっけい）と言う。

石經には佛教ばかりでなく、儒教、道教の經文を刻んだものも殘っていて、中國の所々で見ることが出來るが、とりわけ重要で、最近注目されるようになっているのが房山の隋唐石經である。ここで紹介するのは、この房山石經の中の『妙法蓮華經』寫眞版上下二冊である。中國佛教圖書文物館編で、隆文館（東京）が最近公刊した。

何故房山石經本の『妙法蓮華經』が重要かと言えば、その價値はおおよそ次のように言えるであろう。

第一には、資料としての舊さである。隋、唐時代の七～九世紀に中國で流布した經文の姿が、石に刻まれたおかげで、ほとんど當時のままに今見ることが出來るからである。

法華經の全譯には三世紀末譯出の『正法華經』と五世紀始め譯の『妙法蓮華經』、七世紀始め譯の『添品妙法法華經』があるが、今日見るそれらの經本は、時代がずっと下がって、紙の印刷が始まってから世に出たものである。ところが、房山の石經は隋、唐の時代に出たもの、つまり印刷ではなくて筆寫に據る寫本そのものを土臺にしているのであって、右の法華經三種が出た時代に近い。今回出版された房山石經の內の『妙法蓮華經』を超一級の資料と見るのはそう言う理由からである。

當時の實物であることは、題記（經の最後に付けて、經の

由來を示したり、寄進する理由を書いた文）が示している。房山石經にも澤山あるが、その中で最も早い題記は唐代の「貞觀二年」（西暦六二八年）である。ここに紹介する唐刻法華經でいえば、最後に「貞元八年四月八日上（たてまつる）」と言う題記が殘っている。貞元八年と言えば西暦七九二年、日本でいえば桓武天皇の延暦年間に當たる。いずれも、資料としては超一級である。

第二の價値は、隋や唐代の法華經の姿を殘している實物として信頼できることである。資料として確實に舊いからである。紙に書かれたり印刷された經文には、書き閒違いや印刷ミスがどうしてもおこり勝ちである。時代が經てば經つほど、文章の閒違いは增えたり殘ったままになってしまうものである。

それにまた中國では、舊い經典をそっくり眞似した「疑經」を作る技が進歩していて、その贋せのコピーも大量に作られる。舊い年代が書いてある經典だからと言って、本物とか實物と見なして、そのまま（學術上では）信用できない經典が中國には多い。

そこで、今殘っている經文が本物かどうかを判定するのが研究者にとって大變な仕事になる。この判定方法が、中國の古文書學の一つの分野になっているくらいである。

しかし、石に彫られた經文を資料とするのであれば、それが出來た當時の本物の資料として使うことは先ずは可能である。石に刻まれた經文であれば改變はほとんど不可能なので、原物としてそのまま利用することが出來るのである。

第二の價値に關連するのであるが、第三の價値としては、現在日本で使われている佛典の本文が正しいのかどうか、を判定する時の資料に、この石經は重要な鍵を提供してくれるのである。

以上は古文書としての價値を述べたのであるが、第四番目に注意したいのは、內容上の價値である。この石經の隋刻法華經の後には、すぐ續いて「五十三佛名」が出、そしてまた『金剛般若經』が續いて書かれている。この二種の經が何故法華經の後に直ぐ續いて彫られているのか？　と言う問題は、漢譯法華經の成立史を考える時に良い資料となるのではなかろうか？

次には、以上述べた價値に關連する問題になることであるが、唐刻法華經の最後にも、この法華經を石に刻んだ理由を示す文（前掲、西暦七九二年）が殘っている。このような文は「功德文」と總稱されるもので、いわゆる敦煌文書、つま

り敦煌に殘って今世紀に發見された漢文佛典寫本の中にも付隨して、數多く見ることが出來るが（房山石經と同時代の寫本もある）、現今普通に見る法華經には付いていない。

功德文には、法華經を寄進した當時の人々の信仰の心が現れているので、ここに出た唐刻法華經の「功德文」は、佛教史にとって得難い資料になるのである。

以上が本書の特色と學問的價値の大體であるが、もう少し具體的に資料として學術的に意義ある所を二、三示しておこう。

現在の法華經・提婆達多品では「妙法華經」（大正本三四頁上）とあるところが、この房山法華經の提婆達多品で見ると、隋刻法華經（四一頁）では單に「法華經」、唐刻法華經（六八七頁）では「妙法蓮華經」となっている。この提婆達多品は六朝五世紀末に後から法華經に入れられた一章であり、それまでは、法華經とは別に獨立して流行していた經文である　―　このことは周知の事柄である。

さてそこで、だから法華經の題名一つ取っても、房山石經の提婆達多品では（右に示したように）特にこのように違いがあるのか？　それとも、現行の法華經と隋、唐の法華經とでは、それぞれの經本の系統が違っていたので題名に右のような差が出來たのか？　そうだとすれば、それは何故か？　日本に傳わる版本とはどう言う關係になるのか？　等々、問題は次々に浮かんで來る。

また、この房山法華經で見ると、隋刻法華經では无、万と略字で書いてあるところが、唐刻法華經では殆ど無、萬になっている。一見つまらない違いのようではあるが、注意を引かれる。何故ならば、略字の方が先に使われているからである。それは何故なのであろうか？

元來、「无と言う略字は、道教文獻が主として無に代わって使う文字である」とか、「（略字ではない）萬は人に關する時に使われる」などとか、いろいろな説が傳えられている。しかし、ここでの用法を見ると、そう言う説は正しいのかどうか？　こう言う説は一體何時から、何を根據に出來たのか？　等々考え直したくもなる。

このように、今回出版された房山隋唐石刻『妙法蓮華經』は資料として興味盡きない文獻である。

筆法からみても、隋刻法華經の字體は、私には雄渾、素晴らしく見える。六世紀頃の書法を知る良い資料に成ろう。こうして本書は、書家や書道の研究者にとっても、十分讀む價

値のある資料集であり、使い方によっては佛教學以外の方々にも貴重な資料と成り得るものであるように、私には思えるのである。

房山隋唐石經『妙法蓮華經』（上・下）（福井）